HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人間性の共有を形成すること: 価値観の収斂と異なる未来への道に向けて
Author(s)	タシマ, ナサニエル; クレイン, キャスリーン
Citation	アイヌ・先住民研究, 4, 201-211
Issue Date	2024-03-29
DOI	10.14943/Jais.4.201
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91326
Type	bulletin (article)
File Information	12_4_Tashima_Crane.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アイヌ・先住民研究　第４号　2024　p.201–211　ISSN 2436-1763
Aynu teetawanoankur kanpinuye (4) 2024　p.201–211　DOI 10.14943/Jais.4.201

【シンポジウムの記録・2】

人間性の共有を形成すること：価値観の収斂と異なる未来への道に向けて

ナサニエル・タシマ　キャスリーン・クレイン

要　旨

合意の欠落、見解の相違に満ちた状況では、わたしたちを結びつける考えや価値観に立ち戻ることが大切だ。この発表では、遺骨や副葬品などの埋葬に関連した器物について（子孫たちの）エイジェンシー（行為主体性）を否定することが、子孫たちの共同体にとり尊厳と人間性の否定になりうるさまざまな状況について検討する。まず、遺骨返還が問題化するときの文化的背景と専門的知について概観したあと、現在の対立状況が子孫の共同体だけでなく科学者や学問領域にも大きな損失を与えることを示す。最後に、このような状況を変化させようという意思とそれがうみだす利点を指摘する。

1. はじめに

ただいま！おかえり！

私はニール・タシマ、1890 年代のカリフォルニア州に、さらにそれ以前は日本にルーツをたどる日系アメリカ人である。私が 5 歳か 6 歳の頃、両親に連れられて、祖父母の家に行くたびに、到着後、真っ先に「ただいま（Tadaima!）」と言うように躾けられた。そしていつも、祖母は「おかえり（Okaeri!）」と返す。この単純な挨拶を通して、私はホームというものが特別な場所、いつでも私を歓迎し、ありのままの私を受け入れてくれる場所であることを学び始めた。何年間も、私は異なる世界を理解するために、この単純な概念に立ち返り、それを船の錨のように、他の人たちが自分たちの世界をどのように見ているのか、そして彼らが言語や文化を通してどのようにその場所や時間に根付いているのかを理解できるようになった。

人間性の共有という理解もここから始まった。私は、太平洋地域や東南アジア、アメリカ全土、そしてアフリカやヨーロッパのさまざまなコミュニティに生きる人々とこれまでともに仕事をする機会に恵まれたが、その人たちがホームということばに込める意味や人間性の構築の仕方を通して、生活や文化を理解し続けてきた。まず、ホームと人間性の共有という概念から始めたい。

本論の共著者の一人である私、ニール・タシマは、心理人類学者としての訓練を受け、［社会科学関係のコンサルタント会社である］LTG アソシエイツのマネージング・パートナーとして 40 年の職歴を持っている。また、メリーランド大学カレッジパーク校の人類学部の教授を併任している。

本論のもう一人の著者キャスリーン・クレインは、白人アメリカ女性であり、文脈によってはさまざまな呼称（ガイジン、ファラング［タイ語で白人］、ロファン［中国語で白人］、ハオレ［ハワ

イ語で白人]）をもつ異邦人でもある。人類学の四分野［考古学、言語学、自然人類学、文化人類学］的総合アプローチを強調する教育プログラムを有したカナダの大学で学び、形質／自然・医療人類学者としての訓練を受けた。過去40年以上、米国内外のコミュニティでのさまざまなプログラムの企画者や政策立案者とともに、個人の健康とよりよい生活環境を整えるために、複雑な課題に取り組んできた。私は、仕事においては、常に部外者の立場から出発し、一緒に仕事をする人々の視点、価値観、優先順位をつねに学び続けなければならなかった。ニールと一緒に、私はLTGアソシエイツのもう一人のマネージング・パートナーであり、メリーランド大学カレッジパーク校人類学部の教授でもある。

研究代表者であり、会議の主催者である九州大学名誉教授の太田好信博士、彼の研究チームのメンバー、そして私たち全員を集めてくださった共同主催団体である「ニライ・カナイぬ会」の皆様にも感謝したい。アイヌの方々、琉球の方々、快くお話をしてくださり、経験や見解を共有してくださった方々にも、ここで感謝の意を記しておきたい。

本論では、私たちはアメリカ人特有の限定的視点に基づいて論述している。もし、その内容が、過度な一般論に陥ってしまっているという印象を読者に与えたとすれば、事前にお詫びしたい。また、アイヌ、日本、琉球の文化や歴史についての理解の浅さが目立つとすれば、同様にお許しいただきたい。私たちがこの会話に持ち込みたいのは、次の二つの歴史である。一つは、人類学的な倫理観を発展させるために私たちが関わってきた経験に基づく歴史、もう一つは公的な権力を持つ人々と地域社会との間に敬意ある交流と関係を発展させるために努力してきた歴史である。

前者は、アメリカ人類学会と［応用人類学の専門分野である］全米人類学実践協会（NAPA）の過去2回の倫理声明作成に携わり、30年以上にわたって両団体の倫理に関する専門委員会に参加してきたことである。後者は、太平洋、東南アジア、そしてアフリカやヨーロッパにまたがるコミュニティとともに仕事をし、また、過去40年にわたり、米国内の35以上の民族コミュニティとも協働作業をおこなってきたことをいう。複雑な問題や状況に対処することが、私たちの専門分野なのである。明らかに、遺骨返還は複雑な問題だ。現在、私たち二人はアメリカ人類学会の「遺骨の倫理的扱いに関する委員会（TCETHR）」の特別顧問を務めている。

2. 私たちの議論

日本や海外に住む日本人にとって、「ただいま」や「おかえり」は集団への帰属を示す伝統的なことばといえる。「ただいま」は帰宅時に呼びかける言葉であり、「おかえり」はその人の帰宅を認める返事となる。では、なぜホームなのか。第一に、ホームとは仲間がいる場所であり、自分の居場所でもある。最も良い場合、ホームとは自分が受け入れられ、理解される場所である。他人があなたやあなたの人間性を尊重し、守ってくれる場所ともいえる。だが、本当のホームとは、場所でも、空間でも、住居でもなく、自分が歓迎され、理解されていることを知る環境なのだ。

多くの人々は本当のホームを知らず、その快適さと歓待の外で暮らしている。彼(女)らは家屋(ハウス)に住み、他者とともに暮らしているが、ホームにおける歓待を経験してはいない。もし彼(女)らが受け入れられていないとしたら、彼(女)らの人間性はどのように認められ、尊重されるのだろうか。他者との関係はどこで認められるのか。

私たちは、アイヌと琉球の人々が、祖先の遺骨を管理するエイジェンシー［行為主体性］を否定されたことから、ホームという概念により表現されている充溢感や人間性の尊重をも否定されてきたという考えを、ここでは掘り下げてみたい。また、研究者が自覚するかどうかは別として、研究者が現在の不協和の中で先祖の遺骨に対する子孫たちの権利やエイジェンシーを認めないことにより、研究者も自らの人間性を傷つけている、とわたしたちは考えている。

本稿では、関与するすべての人に利益をもたらし、異なる未来を指し示すようなやり方で、現在の不協和を乗り越える目的に寄与しうる動機づけと方法とを明らかにしたい。誰もが歓待を受けるホームとはどこにあるのか。誰もが歓待されるホームがあることを、どうすれば知ることができるのか。おかえり、ということばは聞こえたのか。私はほんとうにホームに着いたのか。

3. 文化的・専門的な基礎固め

地球上どの社会にも存在するという意味で、人類全体にとり普遍的といえる文化的意義を含んだ限られた数のテーマがある。その一つは、世界中どこの社会においても、死者の遺体や遺骨をケアし、安置するという、生者が死者や先祖に対して負う重大な責任である。多くの社会において、死者や遺体は、死んだ、いなくなった、忘れ去られた存在ではなく、むしろ、個人、家族、コミュニティの歴史の連鎖の一部、死後の世界へのつながり、現世に存在し、家族やコミュニティの生活の中で活動する生きた魂の体現として扱われている。もちろん、アイヌ、日本、琉球の文化についても、死者に対するこのような一般的な敬意と配慮を共有し、無礼や危害を加えるような行動を避ける、という報告がある。

戦争中、敵の遺骨を粗末に扱ったり、遺骨の管理権を奪ったりすることは、味方の優位性や優越性を示し、さらに意図的な危害を加える手段であった。日本も加盟している 1949 年の「ジュネーブ条約」は、遺骨の重要性を認識し、加盟国が戦死者の捜索と遺骨の管理を許可することを明記している。[1]

日本では、アイヌや琉球の子孫たちが遺骨（骨格標本）や関連資料の返還を求めてきた。様々な理由が挙げられているが、とくに琉球人遺骨の場合、遺骨と関連資料は、子孫となるコミュニティの管理下へと組織的に返還されるには至っていない。この事実が子孫となるコミュニティにとって

1 Geneva Convention https://www.ohchr.org/en/instruments-mechanisms/instruments/geneva-convention-relative-protection-civilian-persons-time-war. Accessed 6/8/23

は心痛や不安の原因であり、やがて係争案件となったと聞いている。[2]

4. 人類学とその進化する視点

これまでの数十年間、人類学も大きく様変わりした。この学問は、科学的視点の重要性を強調するだけでなく、死者や関連する文化財の倫理的な扱いを決定する過程に、子孫となるコミュニティの関与を積極的に認めるという方向にシフトしてきたといえる。

ウォーカー（2000: 19-20）は、遺骨を扱う研究に関与しているいくつかの学術団体が公開している倫理綱領を概観し、次の3点に着目した。(1)遺骨は尊厳と敬意を持って扱われるべきであること、(2）子孫は親族や祖先の遺骨の処分を管理する権限を持つべきであること、(3）遺骨はわれわれの種としての歴史を理解する上で重要であるため、遺骨を含めた考古学的コレクションの保存は倫理的にも必須であること。これらの3点は、人類学者と子孫との間に横たわる緊張関係（分断線）を具体的に明示している。つまり、遺骨などの管理権は誰にあるのか、誰が調査を許可するのか、そしてコレクションの維持はどこまで必須なのか。課題となるのは、子孫となるコミュニティが遺骨と遺物を管理する一方で、過去と未来に利益をもたらす調査をいかにして実施するか、共通の利益が交差する場を見つけることである。

アメリカ人類学会を引証したアメリカ考古学協会[3]と、全米人類学実践協会を引証したアメリカ形質人類学会[4]は、人類学者の学問的関心事を考慮するだけでなく、コミュニティや研究パートナーの関心事を考慮するよう、人類学者に指示する「倫理声明」を策定した。これらの声明はすべて生きた文書であり、いまだに進化し続けていることはいうまでもない。

人類学者として、私たちは死者の扱い方、遺骨やその子孫への配慮の仕方に基づき、文化の発展を判断することもある。過去に科学者によって遺骨が研究材料として持ち去られた人々は、生者が死者に対し果たすべき義務や責任から切り離されてしまった、と感じるかもしれない。これらの価値観のいくつかのヴァージョンは、世界中のほぼすべての社会に見られる。遺骨を客体化することは、遺骨を人間として、人としての配慮や関心の域外に置き、人間性を否定するのだ。科学者たちは、自らの名誉ある死者に対しては敬愛の念を欠くことはないだろう。しかし、科学的探求という価値が最優先されると考えているため、その敬愛の念を研究対象となる者には示さないかもしれない。矛盾ともいえるこの発想は、科学の論理だけに着目していれば、気づくことすらないだろう。だが、そのような論理は、もはや擁護できるものでも、支配的な見解でもなくなった。それは、子

2　“The struggle for the return of Ryukyuan ancestral remains” IWGIA News 5/6/23: https://www.iwgia.org/en/news/5197-the-struggle-for-the-return-of-ryukyuan-ancestral-remains.html accessed 6/10/23

3　Society for American Archaeology Statement Concerning the Treatment of Human Remains, April 14, 2021. https://documents.saa.org/container/docs/default-source/doc-careerpractice/statement-concerning-the-treatment-of-human-remains.pdf?sfvrsn=f04be5ff_2　Accessed 6/9/23

4　Code of Ethics of the American Association of Physical Anthropologists (Approved by the AAPA Membership at the annual business meeting on April 25, 2003) https://bioanth.org/documents/3/ethics.pdf　Accessed 6/9/2023

孫となるコミュニティだけでなく、学者や学問分野にも不協和をもたらし、有害となっている考えに過ぎなくなっている。

5. 変革のための挑戦とその機会

5.1 誰が被害を受けているのか

上述したように、私たちの限られた理解からすると、現在の状況は、私たちの懸念の中心である子孫となるコミュニティをはじめ、すべての関係者にとり有害といえる。子孫となるコミュニティに対し先祖の遺骨の管理能力を否定することは、何世代にもわたって伝わり続けるかもしれない弊害を生む。また、遺骨に対する権限の否定は、研究者と子孫となるコミュニティとの間の不協和を継続、または増大させている。このような状況やその他の関連する状況の結果、人類学内部にも不協和が生じてきている。遺骨の管理能力を否定する発想は、子孫との共同作業を排除してしまうという理由で、研究者全体の評判を落とすことにもつながる。最後に、自覚されているかどうかにかかわらず、この状況は関係者全員の尊厳と人間性を傷つける結果を生んでいる。

5.2 現状維持がもたらすいくつかの結果

この状況を変えたいという願望は、主に子孫となるコミュニティと限られた数かも知れないが、日本の人類学者の中にも存在することは明らかである。すでに報告されているように、琉球の人々にとっては、研究者による関与（対話）の欠如が、救済を求める法的な訴えにつながっている。

子孫となるコミュニティに残された手段は少なくなり、その立場は硬直化しているようだ。研究者たちがそれぞれの立場を変えることを通して、もし新たな関係性の交渉が行われなければ、外在的権力が関係者に代わり、すべての決定を下しかねなくなるのではないか、と私たちは危惧する。このような権力には、新しい法律、国家による規制、学問領域における［倫理規範の］変化などがある。子孫となるコミュニティと仕事をすることに消極的な学者や研究機関は、国際的に受け入れられている倫理規範との対立を増すことにもなるだろう。

重要なことに、この対立が進むことで、学者間や、学者と子孫となるコミュニティとの間の協力に向けた可能性が制限され、閉ざされてしまうことだ。そうなると、重要な問題を設定し、それに答えるために協力し合うことから生じる潜在的な利益を、関係者全員がこぞって否定する結果をうむ。私たちは、この弊害が増大する前に、変革に向けた動機を特定し、探求しなければならないと考えている。

5.3 地域社会にとっての勝利のシナリオ、研究者たちにとっての損失のシナリオ

現状は固定されたものではなく、前述のように、法的手続きを通じて、あるいは規制や専門的領域における倫理規範の変更を通じて、子孫となるコミュニティが勝利を収めることで変化する可能

性がもっとも高い。法的手続きによって子孫となるコミュニティが勝利を収めれば、先祖の遺骨を持ち帰り、二度と触れることのないようにすることは十分に可能である。

研究者たちが終着点を引き延ばすことができれば、子孫となるコミュニティは変化が起こるのを待たなければならず、継続的な被害を与え、分断をさらに硬化させることになる。しかし最終的には、遺骨は返還され、過去に情報を与え、未来を予測するような共同研究課題が開発される機会はほとんどなくなるだろう。

別の道を切り開くことも可能だ。

5.4　人骨を用いた研究の利点

私たち人類学者は、自然人類学——特に人骨の研究——がもたらす重要な貢献を理解し、その学問的価値を高く評価している。一例として、人骨研究は、過去の集団の前世代における生活や健康状態について学ぶ機会を提供する。また、現在および将来の世代の健康や福利に関する洞察を得ることもできる。子孫となるコミュニティと研究者が協働することで、過去の生活が現在のコミュニティにもたらしうる潜在的な影響についても、より深い分析と体系的知識を得ることができるはずだ。両者がともに繁栄する世界では、この情報は以下のことに利用されるだろう：

・母集団を理解し続ける。
・現在の個体群に影響を及ぼしている遺伝的・環境的要因について理解する。
・これらの人々のために、より良い、より健康的な未来を創造する。
・子孫となるコミュニティの見解や視点を反映させる

5.5　両者がともに繁栄する世界の中で

自然（ないしは形質）人類学者として訓練を受けた私（キャスリーン・クレイン）は、骨の構造、骨に刻み込まれる力、集団の遺伝学などについて受けた指導を覚えている。その訓練において、遺骨や試料を敬意と尊厳をもって扱うこと、ならびに遺骨や試料を扱うことから生じる責任と義務も含まれていた。私はそのことを、ともに学ぶ学生たちにも教えている。

このような訓練は、自然人類学者にとって一般的なものだと思われる。もしそうなら、研究を計画し実施する人は誰でも、他者の骨を手にするとき、いま一度、畏敬の念と責任を思い起こすべきだ。すなわち、そうでなければ学べないような重要な教訓を遺骨から学ぶ機会に感謝し行動すること、研究は人々の未来をより良いものにするためにあると考え意欲的に行動すること、自分たちの祖先に望むような尊厳を眼前の遺骨に与えることなどの想起である。

科学者である以上、研究する者と研究される者の境界線は一般的に確固としたものである。研究する者は、科学の場にとって関心のある疑問に答えるために、研究される者は操作対象となってし

まう。この客体化[5]（人間を人間ではなく、モノとして扱うこと）は、研究において、また結論を導き出す過程でも、客観性という目標を支える概念として有効に作用する。私たちは研究される対象との関係によって左右されることがなければ、結果に利害関係を持つこともないからだ。しかし、この客体化には代償を伴うことも、同時に銘記すべきだ。その例として、松島泰勝教授が挙げている、次のことばがある：

> 私たち琉球人は、伝統的な儀式の中で神々や精霊に祈りを捧げ、神々と和解し、神々の守護を求めるために、常に自分たちの言語を使ってきた。私たちは、遺骨の中に宿り、死後も私たちを守ってくれる祖先の霊である「骨神（フニシン）」を信じている。先住民の祖先の遺骨の返還運動は、「ゴーイング・ホーム」と呼ばれている。祖先の遺骨を元の墓に戻し、そのための儀式を行うことで、琉球のマブイ（精霊）は安らかに眠り、精神世界の秩序が回復される。それまでは、霊魂の安らぎは決して得られない。[6]

先に述べたように、現状はすべての人、特に子孫となるコミュニティを危機に陥れているように見える。現状を打破する変化を起こすためには、説得力のある理由を明らかにすることが重要になる。次節では、いくつかのアイデアを示すが、結局のところ、何が説得力を持つのか、どのようにすれば集団として変化を起こせるのかを特定することが、関係者にとっては非常に重要になるだろう。

5.6　研究者にとって変革がもたらす潜在的な利点

なぜ自然人類学者は遺骨の独占的管理を放棄し、子孫となるコミュニティと協力するべきなのか。それには、どのような利点があるのか。

変革の第一の理由は、遺骨の倫理的取り扱いに関する世界的な研究倫理の策定に従い、先陣を切って活動することである。そうすることで、規制の変更によって、あるいは訴訟によって、外在的権力による強制的な変更を余儀なくされることを避けることができる。良い結果として、同僚や子孫となるコミュニティとの不協和を減少することができるだろう。

この変革は、遺骨研究の範囲内外で有益な研究を発展させ実施するために、子孫となるコミュニティと協力する道を交渉する機会をもたらす可能性がある。これは全ての人にとってプラスになる可能性である。変化により、資金の種類や供給源も多様化するかもしれない。最後に、そして最重要点でもあるが、変化は、現在および将来のコミュニティの利益になる成果をもたらしうることだ。

5　“To objectify someone is to treat them as an object rather than as a human being”. https://www.vocabulary.com/dictionary/objectify Accessed 6/10/23

6　“The struggle for the return of Ryukyuan ancestral remains” IWGIA News 5/6/23: https://www.iwgia.org/en/news/5197-the-struggle-for-the-return-of-ryukyuan-ancestral-remains.html accessed 6/10/23

5.7　子孫コミュニティに対する潜在的利点

なぜ子孫となるコミュニティは将来、科学者との協働を望むべきなのか。そこには、どのような利点が生じるのだろうか。研究者と子孫となるコミュニティの代表者が現在の対立を乗り越え、協力し合える土壌を見出すことができれば、子孫にとって多くの潜在的利益があるように思える。

第一に、先祖の遺骨に早くアクセスできるようになり、その扱いについて交渉できるようになることは、利点となるだろう。これは先祖の遺骨を取り戻し、すべて持ち帰るということを意味しない。というのも、取り戻すことは、返還を求めている側からすれば満足のゆく結果かもしれいないが、現在や将来において同一集団が受け取るかもしれない利益――たとえば、病、健康や福祉に関する学術上の裏付け――をも放棄することになってしまうからだ。子孫となるコミュニティは、この種の共同研究が、今後のコミュニティの健康や生活環境改善に役立つ条件や研究の形を確立するのに役立つと判断するかもしれない。

第二の利点は、共同研究の成果を通し、子孫となるコミュニティは先祖の生活を具体的に学べることがある。その学習から先祖を敬う気持ちも育まれ、将来にわたり子孫の繁栄を切り開く基盤が形成される。すべての人が目的意識と人間性を共有して前進する機会を確立する可能性があるのだ。

研究者が子孫となるコミュニティと関わることに抵抗していては、この扉は永久に閉ざされることになるかもしれない。

6.　どうすれば変化は起こるのか？

研究者が子孫となるコミュニティと関わっていないことが、重要な障壁となっている。もし関与がなければ、交渉による変化の機会は存在しない。変化しなければ、損失と危険が続くことを誰もが認識しなければならないだろう。誰にとっても最適とは言えない強制的な結論以外に、どのようにして変化を促すことができるのだろうか。権力を握る人々と交渉しようとする地域社会には、変化を促進するさまざまな手段や方法が残されているはずだ。

子孫となるコミュニティは、変化に影響を与えようと努力し、変化を促すためにさまざまな戦略を用いてきた。これから説明するものの中には、すでに使われているおなじみのものもあれば、新たな選択肢を提示するものもあるかもしれない。次の節では、変化を促進するために、様々な協力者を巻き込むという戦略について述べる。

6.1　潜在的な影響力の経路

前述のように、変革のための第一の要件は、各グループにとってお互いが利益を見出す場を特定することである。私たちはいくつかの潜在的な分野を特定した。繰り返しになるが、このプロセスはグループ内で行われることが重要である。どこに圧力を加えれば、変化を導きだせるか、そんな「てこ入れのポイント」も特定したい。つまり、何かが良いもの／有用なもの／望ましいものである場

合、それがない場合のコストはどうなるのか、を問うことである。この発想から、変化を促進するために利用できる、潜在的な圧力をかけるポイントを導き出すことができる。

6.2　同盟や連携とそれへの関与

同盟関係や影響力を持つ人々の関与は、変化を促進するための重要な道筋となる。支援者（団体）には、地域、国、国際的なものがあり、その問題に対するさまざまな視点を代表することもできる。支援者（団体）の種類を考える際には、自明だという思い込みを超えて思考することが大切になる。

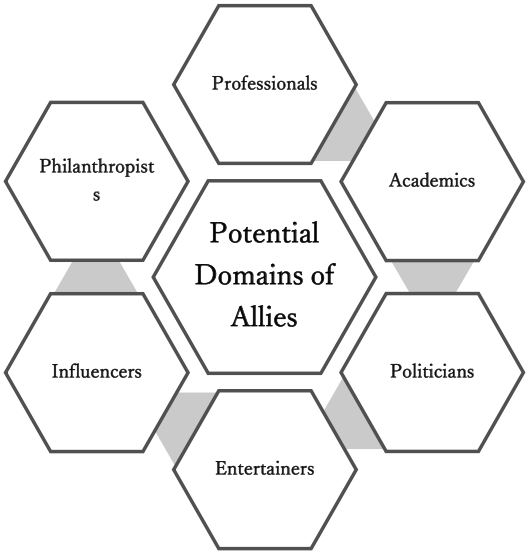


図１では、遺骨返還運動において支援者（団体）になりうる領域を示唆している。

例えば、知名度の高い政治家、人気のある芸能人、高い評価を得ている社会組織などに支援を仰ぐことで、大義にさまざまな種類の後援をもたらすことができる。盟友は、さまざまな文脈で見つけられたり、育まれたりする：

・この問題の認知度を高め、子孫たちの置かれた状況への共感を高める。
・支援者を増やす
・関与の欠如の代償を増大させるネットワークを活性化させる。
・問題に特化した活動の支援をおこなう。
・変革の取り組みを支援するための時間と資金を提供する。
・グループ間のパワーバランスを変える

支援者（団体）を巻き込むことは、説得的戦略であり、対立を強化するわけではない。次のセクションでは、子孫となるコミュニティと、先祖の遺骨やそれに付随する遺物を保有し続ける科学者や組織との間の土台を変えるために、支援者（団体）をどのようにみつけだすことができるかを探ってみたい。

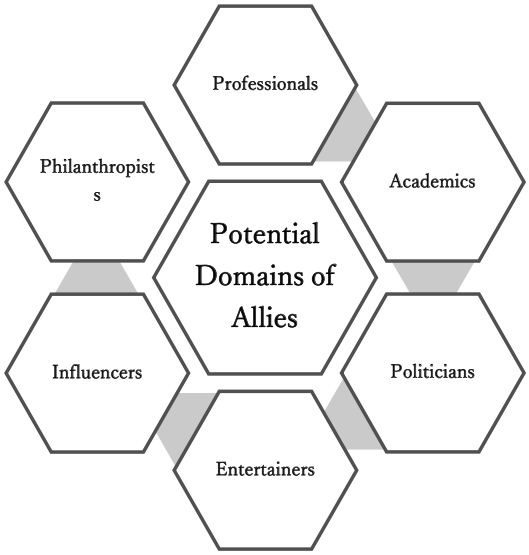
6.3　プロフェッショナル／アカデミック・アライアンス

遺骨返還問題においても、支援者（団体）が現状において支配的な姿勢やポリシーを変化させるために影響力を発揮できる領域は、それぞれの支援者（団体）がどの領域において影響力を発揮で

きるかにより異なるだろう。たとえば、学者が支援者となっている場合では、その領域は学術界ということになる。多くの学術界に訴えることは、幅広い領域からの支援を受け、現状を変化させる力を得ることができる。以下のような支援者（団体）を想定できる：

・国内外の専門家協会
・国内外の研究資金提供団体
・認証機関
・その問題に特化した学術論文の出版社
・学者集団

誰がその大義を支持し、その問題に共感してくれるのか、そして誰がその大義を支持する集団に共感を示してくれるのか､創造的に考えることが重要である。どのような支援者（団体）がいるのか、その支援者（団体）が問題に取り組む上でどのような価値を持ちうるのかを戦略的に考えることは、成功のために不可欠である。潜在的な同盟者と、その潜在的な影響力の及ぶ領域、そして望ましい変革の領域をマッチングさせることで、戦略を導き出すことができる。図２は、同盟者が支援を提供できる可能性のある方法を示している。



盟友や影響力を持つ人々と関わる機会は数多くあり、彼らの支援によって案件を膠着状態から脱却させ、新たな議論の場に導くことができる。

これは網羅的なものではなく、アジェンダを前進させるための創造的思考のためのアプローチである。

支援者（団体）や各領域において影響力を持つ人々と積極的に関わる目的は、支持を高め、関わらない場合の代償を増やし、当事者間のバランスをより良くすることだ。これは説得を目指しており、対立・敵対的である必要はまったくない。連携を第一目標とすれば、有益なコミュニケーションにつながる可能性がある。誰もが否定できない人間性の共有という思想、そして先祖の帰還を願う心情に訴えて、より多くの支持者を巻き込むこともできるはずだ。

7. 人類の集合体を形成する

不協和や合意の欠如に満ちた状況においては、基本的な信念や価値観に立ち返ることがつねに重要になる。まず、当事者間の対話が必要だ。そのためには、学術機関が子孫となるコミュニティと相互に尊重し合い、対話することが求められる。プロセスや成果に対する優先順位を全員が意識することで、オーヴァーラップと相違の両方が明確になる。コミュニティや文化の架け橋となる信念や価値観を定義し、コミュニティのメンバーが共有できるビジョンとは何かを考えてもらうことは、現在、この議論の参加者たちが、コミュニケーションをとるための共通の語彙や、人間性の共有に向けた架け橋を築く第一歩となりうる。

私たちはまず、ホームについて問うことから始めた。ホームとは、歓待、ケア、理解のある場所である。もしそのような条件が存在しなければ、誰も本当の意味でホームにいるとはいえない。私たちは長年にわたり、多種多様なコミュニティと関わってきた経験から、それぞれ異なった視点をどのように議論に持ち込めば、見解、アプローチ、行動の収斂を見出すことができるかを学ぶ機会に恵まれてきた。

私たちは、遺骨の倫理的扱いをめぐる取り組みの欠如が、研究者と子孫となるコミュニティの双方から人間性を奪い取っている状況を探った。私たちは、この状況ではすべての関係者が傷つけられており、変化がなければ、関係者の人間性は傷つけられたまま、放置されてしまうと危惧している。

研究者にとっても、子孫となるコミュニティにとっても、変化がもたらす潜在的な利益について検討したが、最後に、どのような条件下で協働が実現できるかを提言した。私たちがともに人類の一員として共有している人間性を尊重するための道はある。ただ、どの道にもすぐにはたどり着けないのかもしれない。しかし、すべての道は、わたしたちをより良い存在へと導くはずだ。

おかえり！ただいま！

参照文献

Walker, Phillip

2000 Bioarcheological Ethics: A Historical Perspective on the Value of Human Remains. In *Biological Anthropology of the Human Skeleton*, M. Anne Katzenberg and Shelley R. Saunders, eds. Pp. 1-40. New York: Wiley-Liss.

（翻訳：太田好信、池田光穂）